

2013年4月、同志社大学に「グローバル地域文化学部」が新設されて早4年、今春初めての卒業生を送り出したことで、わたしたちの学部は「完成」を迎えました。そこでこれを機に、「GとRの結び方——グローバル地域文化学という挑戦」と題したシンポジウムを開催し、この4年間の活動を振り返るとともに、構想中の新カリキュラムや日々の教育・研究について、いま一度考えなおしてみたいと思います。とはいえ、ただ振り返り、反省するだけではありません。「グローバル地域文化学部」（通称GR）という、世界で唯一の（ユニークでケッタイな？）名前を冠する学部にあって、いかなる教育や研究が可能なのか。そもそも、G（グローバル）とR（リージョナル）の関係をわたしたちはどのように構想しうるのか。このGRという場に集う人々が、何を課題とし、どのようなことを考えてゆくべきか。そして、いかなる言葉や思想を紡ぎ出し、どのような活動を生み出してゆけるのか。その可能性について、共に語り合ってみたいと思います。

講師紹介 鵜飼 哲(うかい さとし)

京都大学大学院文学研究科、パリ第8大学にてフランス文学を専攻。現在、一橋大学大学院言語社会研究科教授。作家ジャン・ジュネと哲学者ジャック・デリダを軸にした20世紀フランス文学、現代思想が専門。マダガスカルなどフランス旧植民地、中東アラブ地域や東アジアのポスト植民地研究など広く多様なテーマ群に関する研究がある。主な著作に『抵抗への招待』（みすず書房）、『主権の彼方で』（岩波書店）、『ジャッキー・デリダの墓』（みすず書房）、主な共著に『国民とは何か』（インスクリプト）、『レイシズム・スタディーズ序説』（以文社）、主な訳書にジャン・ジュネ『恋する虜—パレスチナへの旅』（人文書院）、同『シャティエラの四時間』（インスクリプト）、ジャック・デリダ『友愛のポリテックス(1・2)』（みすず書房）、同『生きることを学ぶ、終に』（みすず書房）など多数。



基調講演 友愛の地政学

— 危機の時代の知の「共同性」を探る —

私たちの個人的な友人関係は時代の激動のなかでどのように生き延びていけるだろう。歴史の試練を横断して残された過去の文書や証言は私たちに今何を教えてくれるのか。人文学と社会科学の接点で学ぶ者たちにとってこれらの問いは、研究すること、生きることの各瞬間に、影のように随伴する。他の時代、他の地域の知識人たちの交友のありかたは私たちの現在を映す鏡でもあり、政治的危機のさなかにある知の「共同性」を思考するためのかけがえのない糧である。

チュニジア人の詩人アブデルワッハブ・メッデーブ（1946-2014）はフランス国営ラジオ放送「イスラームと文明」の著名な司会者として、地域的、歴史的に多様なイスラームの姿を広く社会に伝えることに貢献した。1996年、フランスで初めての「ポストコロニアリズム」をめぐる共同討議の場を組織したのも彼だった。しかし〈9・11〉後に出版した『イスラームの病』のために、メッデーブは多くの友を失うことになる。

彼の思想の軌跡をあらためて振り返ると、苦悩と一体となった貴重な考察の数々が見出される。アルジェリア系ユダヤ人の歴史家バンジャマン・ストラ（現移民史博物館館長）とともに編纂した『ユダヤ教徒／人とムスリムの関係史—起源から今日まで』が、彼の最後の仕事のひとつとなった。1999年の来日時の伊勢、奈良、京都の旅、翌年夏のカイロでの散策の記憶を振り返りつつ、「私が彼に負っているもの」を言葉にすることを試みたい。